空間造りと樹木医

株式会社 岩城 設計部　井出　太亮

樹木医を目指して

私が樹木医試験を受けようと思い立ったのは、業務で既存樹木の移植保存計画を行う際に、樹木医に移植樹木の診断を依頼したことがきっかけでした。

プロジェクトは既存樹木約 60 本を移植するというものでした。2 年ほどかけて移植の準備を進め、移植の難しいと判断された樹木はできるだけ現地で保存できるよう設計変更も行いました。その際にはじめて樹木医の仕事に触れ、樹木に関する知識の深さや説明技術に加えて、樹木に対する強い愛に驚かされました。

その一方で、自分は樹木の知識をつまみ食いに蓄えてきました。その一つひとつがつながっていない状態であり、知識が系統立てて整理されていないことに気づきました。

それから数年後、受験資格が発生する経験年数になり、知識の整理を行いつつ、新しい知識も得たいという思いで樹木医試験を受けることにしました。

樹木医への道のり

選抜試験までは、樹木医学に関する書籍を読み進めました。それと並行して過去問題を解き、答え合わせを繰り返し行い合格することができました。

建築学科出身の私は今まで、樹木に関する講義を聴講する機会がほとんどありませんでした。筑波での講義は、樹木医に関する学問を横断的に網羅するものでしたので、当初の目標であった知識の整理を達成することができました。また、知識不足を実感したことで、合格後も継続的に学び続けることの必要性を再認識させられました。

同期の方々との交流を通して、樹木が好きな人間が世の中にこれほどいることに驚き、大きな刺激を受けました。

樹木医となって

私は普段、造園施工会社の設計担当として業務にあたっています。資格取得後は業務内容にわずかながら、変化がありました。樹木診断の実施や、委託した外部の樹木医に対する監督としての業務です。なかでも、施主に対し樹木の説明などを行う際には、樹木医としての責任を強く感じます。

弊社は設計施工を基本とした造園会社ですので、初期段階から施主や建築設計者と打合せをし、計画を進めていきます。土地の制約や建築設計との兼ね合い等のすり合わせをしつつ造園のデザインを行います。その際、既存樹木や新植樹木の計画に対して将来問題になりそうな部分を初期段階で細かく検討していくことが重要となります。その際に樹木医として意見を求められる機会も少しずつですが増えてきました。

空間の中の樹木

建築やランドスケープの空間をよりよいものにするには植栽部分の仕上げが大きなポイントとなります。樹木にとって生育しやすい環境を整えていくことが、利用者へ、無理なく長く楽しめる空間を提供することができるひとつの要因となります。昨今、人工地盤上の緑化や制約（狭い植栽スペースや室内等）の多いケースが増えてきていると感じます。そのような環境におかれた樹木への負荷を軽減するには、専門分野（建築、設備、造園、不動産等）を横断した知識が必要になります。今後は異分野をつなぐ架け橋のような専門家が求められていくと私は思います。

プロジェクトの初期段階から積極的に関わることで、無理のない植栽計画を提案・実現し、よりよい空間造りに携わっていくことが造園設計者としての私の使命ではないかと考えています。